

第85回麻布獣医学会 一般演題10

本態性血小板血症が疑われた犬の一例

峰重 隆幸¹, 伊藤 哲郎¹, 根尾 櫻子², 久末 正晴², 斑目 広郎¹¹麻布大学附属動物病院, ²麻布大学内科学第二研究室

【はじめに】

本態性血小板血症 (Essential thrombocythemia: ET) は慢性骨髓増殖性疾患の一つでヒトでは多能性幹細胞の腫瘍性変化に起因すると考えられており, 骨髓での巨核球系細胞増加および末梢血における血小板増加を示す疾患である。また, 犬のETの多くは貧血を伴うが明確な機序は明らかにされていない。今回, ETと免疫介在性貧血の併発が疑われた症例に遭遇したのでその概要を報告する。

【症例および初診時臨床診断】

症例は5歳齢, 去勢雄のウェルシュ・コーギーであった。紹介獣医にて貧血を認め, 対症的治療を行ったが貧血が進行したため本学附属動物病院に来院した。本学初診時, 症例は可視粘膜蒼白で活動性が低下していた。血液検査において正球性正色素性貧血 (PCV 8.1%), 赤血球再生能の低下 (RPI 0.12) と血小板数増加 ($1.22 \times 10^6/\mu\text{L}$) を認めた。骨髓検査では赤芽球系細胞は低形成で正染性赤芽球までの成熟が確認された。巨核球系細胞は軽度に増加し, 骨髓塗抹背景には多量の血小板が存在した。3系統ともに細胞異形性は認められなかった。骨髓コア生検材料の組織検査では線維化は認められなかった。

【治療経過】

非再生性免疫介在性貧血を疑い, 第1病日より輸血を含めた対症的治療とプレドニゾロンおよびシクロスポリンによる免疫抑制療法を開始した。PCVお

よび赤血球再生像がわずかに増加したが, 第29病日に血小板数がさらに増加 ($3.36 \times 10^6/\mu\text{L}$) した。初診時より血小板増加が持続しており, 反応性血小板増加の原因に該当する異常も認めなかったため, ETと暫定診断してヒドロキシカルバミドの投与を開始した。血小板数は第36病日の $3.83 \times 10^6/\mu\text{L}$ を最大値としてその後徐々に減少したが, 非再生性貧血は改善せず輸血を繰り返した。第70病日以降, 末梢血塗抹に球状赤血球の出現を認め, 免疫介在性の赤血球系破壊を疑い第78病日よりプレドニゾロン投与量を再び免疫抑制量まで増量した。PCVの低下は緩徐となったが, 第106病日に血小板数の減少 ($0.12 \times 10^6/\mu\text{L}$) が認められたためヒドロキシカルバミドは休薬した。第120病日以降はPCVおよび血小板数は正常範囲内に維持された。

【考 察】

本症例では貧血からの回復過程における反応性血小板増加とETの鑑別に苦慮したが持続的な血小板増加 ($3.0 \times 10^6/\mu\text{L}$ 以上) と骨髓所見からETの発症を疑った。治療により血小板数が減少した後も貧血が持続したが, 臨床所見と治療反応から免疫介在性の赤血球系細胞の破壊が関与していた可能性が考えられた。犬のETについては過去にも同様の報告例 (Bassら, 1998) が存在し, 今後さらに症例を集積し病態を検討することが必要と考えられた。